1953年6月16日　第三種郵便物認可

2026年 1 月12日（月） 3201号　隔週月曜日発行

民主青年新聞

DEMOCRATIC YOUTH NEWSPAPER

みどころ
明けましておめでとうございます
高校生が政治にとりくんでほしいこと　6、7面
古典入門　『フォイエルバッハ論』（上）　4面

▶ ホームページ www.dylj.or.jp　▶ Eメール minsin@dylj.or.jp

新春対談

世界のマルクスブームと日本

『Q＆A　いま「資本論」がおもしろい』がなぜ出版されたのか、青年が学ぶ魅力について、西川龍平日本民主青年同盟委員長と、田中悠日本共産党副委員長・理論委員会責任者とで対談しました。
（進行は中山歩美民青同盟副委員長）

▶左から田中さん、西川さん

２０２６年こそ『Q＆A　いま「資本論」がおもしろい』を青年のなかに

『資本論』に挑戦したくなった

―昨年『Q＆A　いま「資本論」がおもしろい』（以下、赤本）が出版されました。反響はどうですか？

西川　一言でいうなら、『『赤本』を読んで『資本論』に挑戦したくなった」という反響が全体としてありますね。他には、搾取のしくみが分かったという理論的なもの。また19世紀のイギリスで婦人服仕立女性工が過労死した例や、現代の日本の過労死したトラック運転手の例を見て、「資本主義の過酷さにあらためて衝撃を受けた」とその実態に心痛めたというもの。大きな視点でいうと「格差と貧困の広がりや、気候危機の視点から資本主義の限界を捉えられた」という感想や、「社会変革に力を合わせたい」と決意してくれた青年もいます。

田中　「赤本」は現在、7万3千部の印刷を超えました。発刊直後から楽天ブックスの経済部門で2位、アマゾンの「社会・政治」部門のランキングでも100位以内を長くキープしていました。出版されて半年になりますが、瞬間的ではなく、持続的に関心を持たれています。

日本共産党県委員会の事務所で「赤本」の読書会の案内をしていたら、通りかかった高校生が読書会に参加するということがありました。参議院選挙の投票マッチングサイトで調べた20代の青年が、自分でショッピングモールに行って、「赤本」と『Q＆A　共産主義と自由』（以下、青本）を買って読み、後に日本共産党に入党するということも起こっています。ある経済学の教授からは、教え子と『資本論』の研究会を開いており、全員が「赤本」を購入することになったとお便りが届きました。どことなくこの社会の矛盾を感じている人にとってマルクスや『資本論』は、一度は触れてみたいものとして、存在感を持っているのだと感じています。

―すごい反響ですね。この時代に赤本が出版された意味とはなんでしょうか。

西川　一つ目は青年の変化との関係です。10年ほど前は、「資本主義はおかしい」と思う人はいましたが、まだ珍しかったと思います。しかし、今は「資本主義はおかしいのではないか」「資本主義では駄目だろう」「資本主義って胡散臭い」という思いが、広く青年のなかにあり、まったく違う状況になっているのを感じています。青年のなかで「資本主義を乗り越えよう」という動きはこれからもっと強くなると思いますが、「赤本」はそれを加速度的に後押ししていく武器になります。

民青としては、第49回全国大会決議の2章で、『『資本論』ブーム」「科学的社会主義ブーム」を起こそう、とたたかいと並んで学習運動を掲げています。ここは、大会前にアメリカ・ニューヨークでのマムダニ市長誕生のニュースによって、さらに位置づけが高まった部分でもあります。日本でこのようなブームを起こすことができれば、民青の飛躍的な組織発展にもつながる、そのための武器となる「赤本」、というのが一つ目です。

二つ目に、民青同盟は、「青年の要求実現」と、「科学的社会主義と日本共産党綱領を学ぶ」ことを基本的性格としています。これまでも民青同盟は基本的性格を自覚的に発揮してきましたが、資本主義を乗り越えて社会主義を目指す学びを強めることで、民青同盟の基本的性格を新たな次元で発揮できる情勢なのではないかなと思っています。「財界中心」「アメリカいいなり」という自民党政治の「二つの異常」を乗り越えることを強く押し出しつつ、それと並んで社会主義・共産主義を展望する。これによって真の展望が見えるわけですが、「赤本」出版によって、この先進的な部分をより積極的に打ち出せるようになりました。

世界のマルクスブーム三つの要素

田中　民青の大会決議を読んで、『資本論』と科学的社会主義の学びを、同盟内での学習にとどめず、広く青年のなかにブームを起こそうと言っているところにとても励まされました。民青の基本的性格を新たなステージで発揮できる時代になってきているのだなと。

話に出たマムダニ氏が参加するDSA（米国民主的社会主義者）のメンバーは、『資本論』の読書会を開いているといいますね。「ハートランド研究所」という、アメリカの保守系シンクタンクの世論調査では、18歳から39歳の若い有権者の51％が、「次の大統領選挙で民主的社会主義者の勝利を望む」回答をしたという結果が出ました。さらに先の大統領選でトランプ大統領に投票した若者の約3割が、次は民主的社会主義者の勝利を望んでいると。これらは、アメリカ全体で大きな地殻変動が起きていることの現れではないかと思います。

日本共産党の志位和夫議長に、カナダ・ヨーク大学の社会学部の教授で、世界的に有名なマルクス研究者であるマルチェロ・ムスト氏から対談の希望があり、党本部で対談しました。これも「赤本」出版から続いている反響の一つです。ムスト氏の編著『マルクス・リバイバル』では、巻頭で「２０２０年代の始まりにあって、カール・マルクスの真の思想が今日ほどタイムリーで尊敬や関心を呼ぶ時代はなかったのではないかと時折思えるほどになっている」と、マルクスへの世界的な注目を評価しています。

大会決議は世界の流れとマッチしていたといえるのではないでしょうか。

（2面につづく）

発行所
日本民主青年同盟中央委員会
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-20-2
電話(03)5772-5701　FAX(03)-5772-5702
日本民主青年同盟中央機関紙
定価　月680円　〒130円　1部340円
郵便振替00180-4-106690